

Departure English Expression I

Departure 英語表現 I は こんな教科書です

山岡 憲史



『*Departure* 英語表現 I』が完成しました。この教科書の特徴と、それに込めた願いをお伝えします。

1. 「誰に何を伝えるか」を意識した教科書

「英語表現」の教科書に、先生方はどのようなイメージを抱かれますか？ 現行の「ライティング」に似た教科書？ それとも「OC I」の要素が強い教科書？

私たちは「*Departure* I」において、どちらの科目のねらいも取り入れながら、伝える内容や場面を意識し、コミュニケーションの必然性を重視する教科書作りを目指しました。コミュニケーションをする際には、どのような場面で誰に何を伝えるか、ということを切り離すことはできません。この教科書では、使用場面やことばの働きに十分留意して表現させる活動を採用し、コミュニケーションには常に場面が存在し、伝える相手がいることを生徒に意識させる工夫をしています。

2. 文法を基本とした教科書

新学習指導要領は、文法を「コミュニケーションを支えるもの」とし、「言語活動と効果的に関連付けて指導する」よう求めています。*Departure* Iでも、「自分の考えや意見をしっかり伝えるために文法は絶対大切」という考え方のもと、文法シラバスに沿って、英語で表現する際に必要な事項を精選し、その形式・意味・機能に習熟させて、基礎力を養えるように配慮しました。また、文法学習を単に演習に終始するのではなく、「読む」「書く」「聞く」「話す」言語活動の中で学

習を深め、活用できるように編集しています。

巻末には、発展した文法事項を含んだ例文を9ページにわたって扱っています。英語で表現する際に使える、より高度な文法事項について学習を深められます。また、準拠の『*グラマーノート*』では、文法事項の一層の演習や表現練習ができるように、数多くの問題を提示しました。

3. 4技能をバランスよく有機的に結びつけた教科書——読むこと・聞くことも大切に

「英語表現」は当然、アウトプットの要素が強くなりますが、「アウトプットを豊かにするには、言語材料と内容に関わる多くのインプットが大切」という方針を立て、4技能の全てを1課に盛り込んでいます。

各課の最初は、その課の内容に関するスキーマを活性化するための読解活動です。登場人物が日常的な出来事や感想について語る平易な英文を読んで、生徒の興味を刺激します。この中にもすでに、その課で学習する文法事項が盛り込まれているので、文脈から文法事項の意味を考えさせ、暗示的に導入することをねらっています。

文法の活用練習としては、絵を見て簡単な描写をする活動、設定された場面で文法を使って表現する活動を用意しました。たとえば、「青色ダイオード (blue LED) の用途について、先生に尋ねたい」という情報設定をして、Would you tell me what blue LEDs are used for? を導くという、疑問詞を用いた間接疑問文で表現するというような活動です。これは、単なる和文英訳とは異なり、場面を設定することにより、話す必然性や書

<p. 1> ○モデル英文 (スキーマの活性) ○Expressions (文法理解) ○Give It a Try (文法・表現練習)	<p. 2> ○Get Ready to Express Yourself (文法の活用練習) ○Challenge(使用場面を設定した文法活用タスク) ○Use It This Way (機能表現練習)
---	---

<p. 3> ○Get More Informed (課のテーマについての読解活動) ○Listen Up (課のテーマについてのリスニング活動)	<p. 4> ○Write on Your Own (ステップを踏んで1パラグラフ書く活動) ○Speak Up (書いたことに基づいてペア／グループで話す活動)
---	---

▲各課（4ページ）の構成と内容

く意義を理解させ、実際のコミュニケーションで使えるようにすることを目的としています。

3 ページ目には、内容に関する読解活動があります。絵・写真やグラフを見て、それに関連した英文を読みながら、テーマに関わる語彙を学び、その課での文法事項がどのように使われているかを体得できます。後述するように、英文は**生徒の知的関心に訴えるもの**になっています。たとえば、スポーツの課では、野球の監督がなぜユニフォームを着ているのか、バスケットのゴールのネットにはなぜ穴が空いているのかなど、生徒の発見につながる読み物を紹介しています。

リスニング活動でも、**生徒の興味に訴えるスクリプト**を用意しました。科学をテーマにした課では、種の絶滅についての解説文、日本文化の課では能、狂言、歌舞伎の違いについての説明を聞きます。リスニング活動は、内容の要点を取ることを主眼とし、後半の課では聞いて発信するという活動も加えています。このスクリプトにもその課で学ぶ文法事項を盛り込み、学んだことを聞いて理解するという学習を促しています。

4. 無理なく英文が書けるようになる教科書

「1 センテンスレベルでは英文が書けるが、1 パラグラフを書くとなると苦手」という生徒は少なくありません。その原因の1つとして考えられるのは、英語のパラグラフの構成を理解していないということが挙げられます。ですから、「自分の好きな音楽について100語程度の英文で書いてみよう」というような指示をして書かせるだけでは、決していい文章を書けるようにはなりません。

ん。そこで、*Departure I* では、書くプロセスを重視し、それに沿っていけば無理なく1パラグラフが書けるような構成にしました。

まず、Get Ready to Write というコーナーを設け、質問に答えたり、空欄や表の穴埋めをしながら書く内容を固めていきます。その際に必要な語彙は、注記を見たり、巻末の Vocabulary Board を参照したりして知ることができます。次に、モデルパラグラフを読んで、その構成に自分の書きたい情報を当てはめることによって、1 段落を完成します。たとえば、自分の関心のある国について1パラグラフを書く課では、まず Get Ready to Write で、その国の位置、首都、機構、特色ある輸出品や産業、なぜその国に興味があるかについて、単文を完成します。次に、同様な情報が書かれてある、日本についてのパラグラフを読み、そこに自分の関心のある国の情報を埋め込んでいくことで1パラグラフが完成するという仕組みです。少子化の問題について原因と問題点を書く課では、高齢化の原因と問題点の書かれた文章がモデルになっています。

ここでもまた、その課で習得すべき文法事項を使えるように工夫を凝らしました。関係代名詞を学ぶ課では、尊敬する人物について関係代名詞を使って説明したり、仮定法過去の課では、「自分がもし外国語を自由に使える力があればどんなことができるか」についてのパラグラフを、仮定法過去を使って書くタスクを用意しています。

生徒はいつか、自分の力だけで英文を書けるようになる必要があります。しかし、自転車に乗れるようにしようとして、いきなり補助輪のない自

転車に乗らせても決してうまくできないように、最初は手厚い支援が必要です。*Departure I* のライティング活動は、**独り立ちをする準備をするための過程を重視した**親切的な構成になっています。

5. 「書いてから話す」を意識した教科書

英語表現 I では「話す」活動も大切な要素です。しかし、これについても、話す内容や言語材料を与えずにただ「話しなさい」と言っても、定型表現を使うだけの活動になってしまったり、文構造の伴わない単語レベルのコミュニケーションになってしまいます。*Departure I* では、**自分が書いた英文をもとに、それについてペアで伝えたり、グループで発表したりする活動が設けてあります**。「書いてから話す」という手順は、生徒が構造のしっかりした英語を話すための効果的な方法として、極めて有効なものです。日常の用を足すコミュニケーションだけでなく、自分の言いたいことを発信することは、今後ますます重要になってくるでしょう。その意味で、「書いてから話す」という指導のあり方は、これからのスピーキング指導の要諦ではないかと考えます。

6. 多彩なテーマを扱った教科書

Departure I は、取り上げるテーマとして、生徒の知的な関心を刺激するようなものを多く取り上げ、**生徒の学習意欲を喚起する教科書に作り上げました**。

「学校生活」「友人」「自分の住む街」「映画」「スポーツ」といった生徒の身近なテーマから、「環境」「食生活と健康」「情報社会」「世界旅行」などに視野を広げ、「人口問題」「地理」「進化・宇宙」「異文化理解」「日本史」「日本文化」など、幅広く多彩な内容を扱い、問題意識を深く掘り起こすことに努めました。テーマについては、「読む」「書く」「聞く」「話す」活動を通じて一貫したものにしているだけでなく、**文法の例文や演習問題もすべてその内容をテーマと関連付けています**。たとえば、「尊敬する人物」の課では、ステ

イーブン・ホーキング、モーツァルト、ビートルズ、紫式部、ガンジー、北村康介、安藤忠雄、ヒラリー・クリントン、手塚治虫、エドバルド・ムンク、白洲次郎、シュリーマン、湯川秀樹、バッハ、植村直己など、多彩な人物が登場します。機械的になりがちな文法演習で、少しでも知的な興味を持ってもらえるようにした工夫の跡を感じ取ってもらえることでしょう。

また、日本や世界のさまざまな地域を取り上げているのも大きな特徴です。たとえば、日本については、函館（北海道）、角館（秋田）、花巻（岩手）、山形県、七尾（石川）、向源寺十一面観音（滋賀）、京都市、唐招提寺（奈良）、熊本城、栗林公園（香川）、道後（愛媛）、首里城（沖縄）などを取り上げました。日本や世界の各地に思いを馳せることができるでしょう。

7. 懇切丁寧な指導書、副教材を用意した教科書

教師用の指導書は、先生方が実際に教える時にさまざまな側面から役立つように、詳しくかつ多くの発見があるように書きました。文法・語法の徹底的な解説はもちろん、文化情報・背景知識は短い例文についてもすべてつけています。さらに、指導手順や発展活動など、「痒いところに手が届く」ように、また先生方にも発見のある指導書を目指して、**執筆者自らが書き下ろしています**。

その他、前述のグラマーノート、ALT 用の *Teacher's Book* も用意しました。デジタル上では評価問題集も完備していますので、試験問題作成の際にも大いに実用供することでしょう。

Departure I は、現場のニーズに応え、生徒たちの学習意欲を刺激し、文法の学習を中心にして 4 技能をまんべんなく伸ばせる教科書として、1 文 1 文、1 行 1 行に時間と心を込めて作り上げました。先生方のご感想とご批判をお待ちしています。

（やまおか けんじ・立命館大学教授）